

保育における「話し合い」と保育内容  
－ 戦後初期の実践記録を中心に －

田 中 まさ子

「Discussion」 in Early Childhood Education and its Contents  
－ Focusing on Documented Practices in the Immediate Post-WWⅡ Era －

Masako Tanaka

Abstract

Discussion enables us to respect each kindergarten child's opinion, and it allows them to realize self-esteem. At the same time, communication among kindergarten children can be deepened through discussion. Consequently, discussion will develop into new and creative experiences for them. I will deal with a case study of a kindergarten, which historically, has placed much emphasis on discussion. Through this study, I will investigate the correlation between discussion and a course of study in kindergartens. In addition, I will study the background to help better foster the art of discussion.

Received Oct. 30, 1999

はじめに

近年、保育は保育者と子どもの共生的、共働的あるいは両義的な作業であると捉えられつつある。すなわち、保育は保育者による一方的な指導でもなく、子どもの自由に任せるものでもない。共に影響を及ぼし合いつつ園生活の創造に参加し、そこに生じてくるさまざまな課題やそれら乗り越えた時の喜びを分かち合うものであるという意味である。その背景には、地域社会や家庭の変貌によって、もはや理想的な子どもの発達モデルを堅持し得なくなった保育者の苦悩もある。しかし、逆にその困難を生かして、保育者と子どもが共に園生活を築こうとするのが共生・共働の保育である。

さて、園生活の創造のための具体的な手だてとして、保育者と子どもによる「話し合い」がある。本研究は、この話し合いを重視し積極的に採り入れてきた一つの幼稚園を事例として取り上げ、史的考察を加えるものである。またそれを通して、共生の保育を創造する手がかりを探る。

## 1. 本研究の目的と方法

「話し合い」を重視する保育は、日本の幼児教育史上では集団主義保育の実践から生み出された「話し合い・伝え合い保育」がよく知られている。これは「まわりの仲間と相談しつつ協力し、まわりの世界をつくりかえることによって自分自身をも発展させていくのが人間である」<sup>1)</sup>という考えに基づいている。換言すれば、伝え合いという働きを人間の活動の基本に捉えた人間観・保育観である。この「話し合い・伝え合い保育」は1959年に提唱された。

他方、それ以前からフレーベル教育学や進歩主義教育を受容しつつ「話し合い」を実践してきた別の系譜がある。フレーベル教育学や進歩主義教育は、ともすれば子ども個人々の興味や関心に基づく活動を偏重しているかに喧伝されるが、実際は個と集団の緊密な関係を主張している。例えばフレーベルの主著「運動遊戯」では、個を生かしつつ全体の目的に添った自在なグループ編成によるゲーム論を展開している。また、進歩主義理念を反映した代表的な幼児教育書 Conduct curriculumは民主々義的な幼稚園生活やクラス運営を掲げ、そのために子ども達の協議 (Croup meeting) や相談 (discuss) が必要に応じて持たれるよう奨励している。

本研究は、こうした幼児教育思想を基盤にして「話し合い」の実践に取り組んできたS幼稚園 (1892年創設、西宮市、以下本園と称する) を対象とした事例研究である。また本研究は戦後初期を対象とした史的研究でもある。この時期は戦後民主々義の隆盛が背景にあって、本園の長い歴史の中でも殊に話し合いが活発になされた時代と目される。そこで本研究は、本園に残っているこの時期の「保育日誌」を資料とし、次のような研究目的を設定した。

- (1) 当時の保育日誌から「話し合い」の実情を概観する。
- (2) 「話し合い」と保育内容全体との関連を考察する。
- (3) (1)、(2)をふまえてこれからの保育において「話し合い」が持つ意義や可能性を探求する。

本研究の資料となるのは次の保育日誌である。

- a. 1942年度 (昭和17年度) 3学期の保育日誌 (年長・年中混合クラス)
  - b. 1948年度 (昭和23年度) 3学期の保育日誌 (年長クラス、年長・年中混合クラス、年中クラス)
  - c. 1956年度 (昭和31年度) 3学期の保育日誌 (年長・年中混合クラス)
- (いずれも聖和大学歴史資料室蔵)

保育日誌は断片的にしか残っていないのが実情であるが、幸い、時代背景が比較的明確な上掲の日誌を選び出せた。すなわち、防空訓練が多発して休園に追い込まれる直前の1942年度、「保育要項」が刊行された1948年度、そして「幼稚園教育要項」が刊行された1956年度である。この中で戦後初期のb. 1948年度保育日誌を中心に考察を行なう。さらに、補足的にa. cとの比較を行なって戦後初期の話し合いの保育をより明らかにしたい。

また、保育の詳細を把握するために、面談調査を加えた。面談の対象は南信子氏である。(1904生、北陸学院短期大学名誉教授、1945～1950年まで本園教頭として保育実践の指導的役

## 保育における「話し合い」と保育内容

割を担った。) 面談の日時は1998年12月6日12:30～17:30、場所は南信子氏のご自宅である。

### 2. 日誌にみる「話し合い」の概要

#### (1) 保育の特色

本園は、フレーベル幼児教育思想の基盤の上に進歩主義教育を導入した歴史がある。従って自由保育、児童中心保育の色彩が濃い。1948年当時のクラス編成は、年長(5歳児)1クラス(緑組)、年長・年中混合1クラス(黄組)、年中(4歳児)1クラス(赤組)であった。1クラス20名前後であった。このクラス編成を基本としながらも、合級・分級という形態を採り入れて各クラスが相互に柔軟に交流しているところに特色がある。日誌からは1日に1～2度合級・分級をしていたことが分かる。今日で言う異年齢の縦割保育である。いつ、どのように合級・分級するかは活動内容や目的によって決まる。それを保育者達が週の初めに打ち合せをしておく。時には、緑・黄・赤の各クラスを半分ずつに分けて組み合わせたグループで保育を行なうこともあった。「話し合い」の他、グループで行なう「お話づくり」、「歌づくり」が盛んであった<sup>2)</sup>。なお、年少(3歳児)クラスの保育は1941年～1957年の間、中断されていた。

#### (2) 「話し合い」の定義

本園において、保育者と子どもが円形もしくはU字形を作り一定の時間話し合う行為は、すべて「話し合い」と呼ばれていたわけではなく、「相談」、「会話」、「批評」などとも言われていた。日誌の中から事例を出してみよう。

##### 話し合い

今日のおままごとについてみんなで話し合ふ (赤組 2月5日)

##### 批評

お仕事\*の批評 それぞれ批評してみせる (黄組 12月20日) ※自由作業のこと

##### 相談

お仕事相談 大きな紙にかいた絵を見せる。T夫のジープ、工夫の電車を見せる。窓のあけ方や入り口など、どうつけたらよいか話し合ふ (緑組 3月6日)

##### 会話

外で遊んだ事について、特に雪溶けについて会話

どんな日が一番あたたかいのか

お日様はどんな仕事をするのか

お日様までどの位あると思ふか

お日様をつくって下さった神様 (黄組 2月19日)

(下線と※の註は引用者による)

これらの語は、保育者によって多少異なり明確な定義づけはできないが、強いて区分すると次のようになる。「相談」はテーマが明確で、それをクラスの全員が共有していて、具体的な

結論や約束ごとを引き出す場合に使われる。「話し合い」は必ずしも早急に結論を出さなくてもよい場合に使われることが多い。「会話」は自由に語り合うこと自体を楽しむものである。「批評」となると物ごとの特色を比較したり指摘する必要があるって、子どもなりに批判的・審美的態度で臨むことが求められる。日誌によれば、「相談」の多いクラスや「話し合い」の多いクラスなどそれぞれである<sup>3)</sup>。以上の事から、「話し合い」と一口に言っても、さまざまな意味合いや自由度・緊急性が含まれているのが分った。

(3) 「話し合い」の時間と内容

「会話」や「相談」などの話し合いは、日常の保育の中でどのような時間帯に行なわれていたのだろうか。黄組（年長・年中混合クラス）の日誌から当時のディリープログラムを推測するとだいたい次のようである。

8 : 3 0	登園	室内での自由作業
		個人やグループの遊び
1 0 : 0 0	片づけ	
		リズム表現や歌（弁当のない日はおやつ）
		お話・絵本など
		クラス全員での活動
1 1 : 0 0	外遊び	
		個人やグループの遊び
		集まり・礼拝
		クラス全員での活動
1 2 : 0 0	降園あるいは週1～2回の弁当	
1 3 : 0 0		(降 園)

図1：黄組のディリープログラム

緑組（年長クラス）はこれと同じ。赤組（年中クラス）は自由作業と外遊びの時間帯が入れ替わっている。

## 保育における「話し合い」と保育内容

黄組（年長・年中混合クラス）の場合、「話し合い」は自由作業の片づけの後に持たれることが最も多い（17件）。次いで外遊びから戻った時（4件）、その他、リズム表現やお話・絵本の語り聞かせなどの活動に包摂される場合もある（各々1～2件）。緑組（年長クラス）では、自由作業の片づけの後に集中している（10件）。すなわち、黄・緑組では、個別的、自発的、拡散的な活動の後に挿入されているのが分る。赤組（年中組）では、室内でのお話・絵本の時間、リズム表現の後（6件）、あるいは降園前の集まり（5件）など、ディリープログラムの後半に挿入されている。どの位の時間の「話し合い」だったのか明らかではないが、おそらく黄組・緑組ではある程度のまとまった時間を費やして話題を深めたであろうし、赤組のような降園前では、比較的短時間の集まりではなかったか。いずれにせよそれぞれのクラスの特徴に応じつつ、みんなが顔を合わせて話し合う活動を入れることによって園生活のリズムを作っている。また「話し合い」は、基本的には「分級」の時間に持たれている。少人数で落ち着いて行なうことをねらったようである。

次に、「話し合い」の内容について触れる。保育者と子ども達は何について話し合っていたのだろうか。これを分類する前に、本園の園生活の構造を整理しておこう。

園生活は、保育者と子ども達が共に生活者としてかかわり合い、それがさまざまな活動となって具体化されるのだが、それらの活動を3～4つに区分することができる。まず、日常繰り返される基本的な生活活動がある（弁当、おやつ、手洗い、かたづけなど）。次に子どもの自発的で自由な活動があり、個人や気の合った友達で展開される（自由作業、遊びなど）。そして、保育者の計画に基づいた課題的な活動がある。クラスの子ども達は共通の課題意識を持って取り組む。これにはリズム表現、絵本の読み聞かせ、お話づくり、そして日数をかけて取り組む行事や、遊びと名づけられていても保育者が組織化したごっこ遊びがある。本研究では園生活をひとまずこのように整理した。それでは「話し合い」の内容は生活活動、自発的・自由活動、課題活動のどの分野についてなのか、詳しくは表1にまとめた。

表が示すように、「話し合い」の内容は子どもの日々の生活や遊びに結びついたものである。生活活動や自主的・自発的活動の中で生じてくる問題を取り上げ、「どのようにしたら～できるか」「～のためにどうしたらよいか」などという形で「話し合い」が持たれている。「どうしようか?」と問われることによって園生活の一端を子ども達自身が引き受け分ち合うことになる。別の言い方をすれば、目的を持った園生活を送ることになる。課題活動は保育者の指導性の強い側面があるが、活動が展開する過程でやはり「話し合い」が持たれている。課題活動と言えども、決して保育者の一方的な指示に終始するのではない。

また、「話し合い」は、子どもが現在直面している内容ばかりでなく、時には保育者が子ども達の視野を広げるような内容を提供する場合もある。例えば、黄組が課題活動の中で持った「話し合い」においては、1～2週間先に予定している行事「ひなまつり」や「展覧会」が話題となっている。また緑組では、生活活動において「おやすみのお友達について考える」のよ

うな「話し合い」がある。現在姿の見えない友達仲間を思いやる内容となっている。このような「話し合い」を通して、子ども達は現在の時空間にないものに向けて互いにイメージを構成し共有し合うことが可能となる。それは子どもの育ちにとって必要な経験ではないだろうか。

また、「話し合い」の内容は、子どもにとって実質的な経験と内面的な経験の両方を含んでいる。前者は具体的な行動あるいは何かを作り上げたりより良く表現するために必要な技術・技能に関するものである。後者は「どうしたら友達と仲よく遊べるか」とか「何でも自分からやるように」といった、子どもの意欲や心情に触れる内容である。

最後に、年齢による相違という視点から「話し合い」の内容を捉えたと、赤組（年中クラス）において生活活動に関する内容の多さが目立っていた。幼稚園で初めて集団生活を体験し、友達・仲間関係にさまざまなトラブルが生じたのか、保育者はこれに関する内容を「話し合い」において多く取り上げていた。これに対して黄組、緑組では生活活動よりも自主的・自発的活動や課題活動に関する話題の方が多くあった。

#### (4) 「話し合い」の史的考察

これまで考察してきた「話し合い」の保育は、本園においてどのような経緯で形成されてきたのだろうか。その史的背景には前述したように2つの思想の重なりが見られる。1つはフレーベルの幼児教育思想であり、他の1つは進歩主義教育思想である。いささか雑駁な言い方をすれば、前者が「話し合い」のための基本的な枠組を用意し、後者が具体的な内容を提供した。基本的な枠組とは、クラスやグループの柔軟な捉え方、個と集団の緊密な関係、それらを具現化するために輪（円形）を重視し大小の同心円で顕在化させたことである。また進歩主義による「話し合い」の具体的な内容の提供とは、明瞭な言葉で自分の体験を語ることや交代・順番に話すことを奨励した点である。

まず、フレーベル幼児教育思想であるが、彼が著した「運動遊戯」は、彼が子ども集団をどのように捉え指導するのかが示している。それによれば、子ども達は彼らの特性や要求、活動の目的に応じて分れたり再統合されたりして多様なグループを構成している。単に年齢によって峻別された固定的なクラス編成ではない。また個人と集団を対立関係に置くのではなく、個の特性が発揮されて秩序ある集団が形成されるのを理想とした。その理念を輪でもって具体化しようとする。「運動遊戯」はさまざまな輪で構成されている。

「先に大きな輪から小さい輪がつくられたように、遊戯全体の終りに、これらの小さい輪はすべて解かれて再び一つの大きな輪と一般的なものとが、最も美しい順序と調和においてあらわれることが可能となる。」<sup>4)</sup>

この言葉が示すように、輪は一人一人と群れとの調和である。輪に連なる子ども達は、輪の全体を見渡してその重要な一員としての自分の存在を自覚する。また、輪を構成している全員で成し遂げるべき目的を意識する。輪になって回れば、先刻まで自分がいた位置に他者がいることになり、自己を相対化しつつ他者の存在に気づく。

## 保育における「話し合い」と保育内容

フレーベル教育学における輪の重視は、幼稚園において円形の重視として導入された。黎明期の幼稚園の姿を伝える文献、例えばKindergarten Union of Japan（略称、J.K.U.）には、morning Circle や Kindergarten Circleなどの言葉や写真が見える。朝の集まりやゲーム、幾つかの行事は円形でなされていた。またそのために保育室の床に大小の円を描き色分けした幼稚園が多くあった。それは本園にも見られるようなクラス編成のあり方や赤、黄、緑といったクラス名にも繋がっていた。フレーベル幼児教育思想が、保育者と子どもが円形を作り「話し合い」を実践するための基本的な部分を用意したと前述したのはこの意味である。

他方、進歩主義教育は「話し合い」の具体的な内容と方法を提示した。進歩主義の考えでは、言葉は個人の発達に側面においてだけでなく、民主主義の理念を体得するための道具でもあった。従って幼稚園生活においても、子どもが意見を言い合うことは重視される。その具体的な方途として、例えばConduct curriculumでは、クラスの集団や他者に向けて明瞭な言葉で自分の体験を話すこと、順番や交代を尊重して話すことなどを望ましい経験として奨励している。

本園が進歩主義教育の理念を積極的に受容したのは1920年代であったが、当時の保育を窺わせるディリープログラムが残っている<sup>5)</sup>。

8 : 3 0	登園
9 : 0 0 — 9 : 4 5	静かな音楽、お祈り、皆であいさつ カレンダーに印をつける。 スキップ、マーチ <u>会話…クラスでの新しい経験に参加したことを話す</u>
9 : 4 5 — 1 0 : 3 0	グループに分れて恩物あるいは作業
1 0 : 3 0 — 1 1 : 0 0	年少児…戸外での活動 年長児…ゲームあるいは劇遊び
1 1 : 0 0 — 1 1 : 3 0	年少児…室内でゲーム 年長児…戸外での活動
1 1 : 3 0 — 1 2 : 0 0	グループに分れて恩物あるいは作業
1 2 : 0 0 — 1 3 : 0 0	昼食、降園のための身じたくをする。

### 1923年のディリープログラム（原典は英文、下線の訳は引用者）

この中に「会話」という時間が設けてあり、園児が自分の経験を話し合う活動がある。従って、遅くともこの時期以降、「話し合い」は本園の保育において位置づけられ定着していったと推測できる。そして戦後、日本の幼児教育界が新しい保育を模索していた頃、「話し合い」のような活動は、民主主義に基づいた時宣に適う保育として改めて重視されたのではなかったか。本研究の資料である保育日誌は、ちょうどその当時のものである。また、折から「保育要領」が刊行された時であり、その主旨を実践するにあたっては、理解不足や行政側の伝達不徹底があって保育現場では少なからず戸惑いが生じたとされる<sup>6)</sup>。これに対して、本園は戦前か

ら子ども中心の保育実践の蓄積があり、「保育要領」の主旨を実践している園として参観する者が多かった。また1947年には「保育要領」の原案を提供した連合軍総司令部民間情報局のH.ヘファーナンが本園を参観し、その保育を高く評価したという<sup>7)</sup>。

### 3. 「話し合い」と保育内容の関連

保育者と子ども達との「話し合い」は彼らの日々の経験、換言すれば保育内容にどのような影響を及ぼすのだろうか。ここでは本園における保育内容と「話し合い」がどのように関連しているかを考察する。

一般に、幼稚園や保育所における保育内容とは、乳幼児期の人間形成に資するすべての事柄を指している。そしてそれらの多くは日々の園生活の中で何気なく繰り返される乳幼児の経験や活動として示される。換言すれば、友達と群れたり歌ったり、食事をしたりすることなどによって展開されるものであって、特別な形態を取って保育者から乳幼児へ施されることは少ない。しかし、だからといって園生活が虚しく流れるようではいけない。何気ない園生活においても、子ども自身が意義を見出し、目的を持って取り組み、それを達成した時の充足感や自己肯定感を得る機会を持つことは、子どもの育ちにとって重要にちがいない。こうした観点からすれば、「話し合い」は子ども達が表現したり行動したこと、あるいはこれから生じる行動の意義や目的を子ども自身に投げかける役割を持つものとして期待される。

果して、本園における「話し合い」は保育内容とどのようにかわりどのような役割を備えていたのか。これに関して図-1のように整理した。(1)~(3)について事例を上げながら説明する。

#### (1) 経験の確認としての「話し合い」

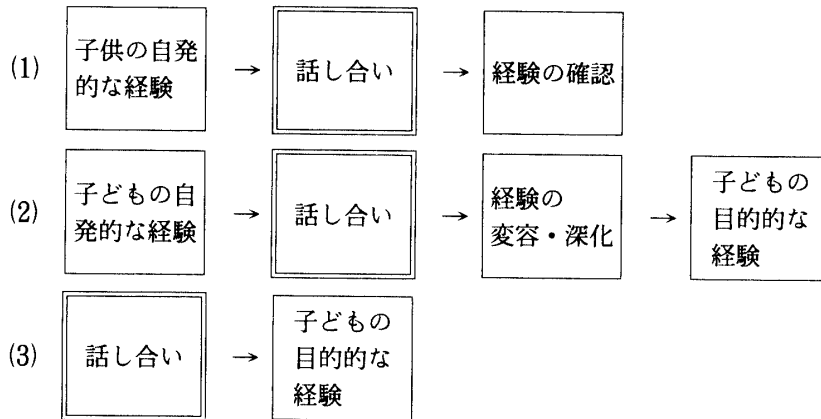
「2-(3)『話し合い』の時間と内容」の箇所で触れたように、緑組（年長クラス）・黄組（年長・年少混合クラス）においては、自由で自発的な作業や遊びの後に「話し合い」が持たれるケースが比較的多かった。また、表-1に示したように、「話し合い」の内容もそれらに関するものが多かった。自由で自発的な作業や遊びの時間において、子どもが生み出す活動は多様である。短時間に流動的に変化していく活動もあれば、長時間にわたって特定の場所で継続する活動もある。時間の長短にかかわらず、子どもが活動の中でさまざまな発見をしたり目的を持ったりするものもあれば、そこまで深化しないものもある。子ども同士のかかわり方にしても、気の合った仲間同士の交わりの場合もあれば、単発的に群れている状況もある。

このように個々の子どもや小グループが自由に行動した後に「話し合い」を持つとすれば、それはまず第1にそれぞれの報告的要素の強い「話し合い」で始まるのが基本であろう。

おそらく「○○ちゃんと遊んだ」、「楽しかった」といった単純な言葉で表現されるものかも知れない。しかし、自分が好んだ仲間や遊びを他者に向けて表現する行為は、経験してきたことをその子ども自身が改めて認識する作用を生じる。それは集団の中で営まれる行為であっても、自己肯定感を伴う極めて個別性を優先した「話し合い」である。黄組や緑組の日誌に最も多く見られたのは、この型の「話し合い」のようである。(図-1の(1)を参照)



保育における「話し合い」と保育内容



図－1 「話し合い」と保育内容の関連の類型

	緑 組		黄 組		赤 組	
生活活動	テーマ ・生活態度について  ・友達について	事 例 「もっとみんな元気に何でも自分からやるように話し合う」(1/19)  「おやすみのお友達について考えてみる」(2/24)	テーマ ・当番表について	事 例 「お当番表の相談」(1/16)	テーマ ・あいさつについて ・片づけについて  ・友達について	事 例 「ありがとうといふ事をわすれずに」(1/26) 「箱積木のしまい方について」(2/9) 「どんなにしたらお友達と仲よく遊べるか話し合ふ。箱積木のもち方も考へる」(2/12) 「みんなで良夫の態度について話し合ふ。いつまでもすねたり片づけなかったり…」(3/9)
自主的・自発的活動	・ままごと遊びについて ・自由な製作や表現活動について	「おままごとについて」(1/21)  「お仕事の相談。栗山がたくさん色々のものが出来たから火曜日に店屋ごっこをしようといひ出す。みんなで店屋さんになる人。うる人、つくる人、お家の人などをきめる」(1/31)	・自由な製作や表現活動について  ・遊びについて  ・外遊び	「どこへゆくのか、何といふ船か等について話し、名前をつける。〇〇の提案でミナト丸と名前をつける」(2/27) 「悪い遊びとよい遊び。いつでもできるだけよい遊びをする。ピストルの遊び、人のいやがる遊び」(1/16) 「砂遊びをする時について」(2/3)	・外遊びについて  ・自由な制作や表現活動について	「みんなで明日、お家をつくって遊ぼうといふ事になる」(2/2)  「お仕事の相談」(2/2)
課題活動	・ごっこ遊びについて(お店ごっこ、郵便屋さんごっこ)  ・園外保育について(散歩)	「お値段のかいた数字が15円のつもりで51とかく。みんなのかいた数字をみる。1、2、3、4、5、8、10、15」(2/3) 「お店屋さんにかひに行くとき、どうしていか、ご本を売る時は何とって売ったらいかななどを話しあふ」(1/28) 「お散歩に行くために色々話し合ふ」(2/20)	・行事について(ひなまつり、展覧会) ・表現活動について(歌づくり、お話づくり、お面づくり) ・ごっこ遊びについて(郵便屋さんごっこ、ラジオごっこ、お店ごっこ、お家ごっこ)	「その意味と作品をつくる相談、展覧の仕方。遊び方について。子供達のはり出しと絵は大判画用紙にきめる」(2/24) 「ニュース、b.k.放送時間と名づけ。姿は見えずによくきこえるように考へる。プログラムの相談」(2/18)	・表現活動について  ・ごっこ遊びについて	「1年中の歌を相談してうたふ」(3/15)  「こままごととしているところ絵を見せながら、色々おままごとについて話し合ふ」(2/4)

表1 「話し合い」の内容の実例

(2) 経験の深化としての「話し合い」

「話し合い」は子ども達の経験や活動を子ども自身に確認させるばかりでなく、さらにそれらを変容させ深化させていく役割を担っている。1例として、黄組2月25日(火)～28日(金)の日誌から「ボートごっこ」の様子を取り上げる。

2月25日(火)

9時には一同揃ふ

箱積木にて自動車遊びをM夫、Y夫、S夫がし始めたので、

O夫、U夫が遠慮したので、他の積木を与えて刺激する。

よい考へのあるボートをつくったのを見て、箱積木の方も刺激されボートをつくる

權のいらないボート、舟をつくりマストをつくる

ひごにマストをつけるが旗を上げるかが問題になる

boats 補捕鯨船の本と一緒に見て考える。(後略)

2月27日(木)

Boatの続きをする

M夫、Y夫、K夫3人が組み、S夫、U夫が分かれる。

前者は大きい積木で如何にも満足したように遊ぶ

船の形がなかなか出来ない 色々に考えよく工夫する

両者ともあまりいい形ではない 乗ってボーボーといっている

船の中の色々のおしごとについて相談 どこへ行くのか 何という船か等について色々話し  
名前をつける K夫の提案によってミナト丸とつける

M夫が名前をつける 色々の仕事について船長、コック、事務長等について話す その役割を  
きめるにあたってなかなかきまらない D夫に御飯をたく人になれという Y夫に、字が書けるから字を書けという

S夫、M夫 よく協力して考えて小さい積木でつくる(後略。下線：引用者)

2月28日(金)

ボートや船についての話の本を皆で読む

男の子 特に興味をもって読む 女の子はひなまつの<sup>(ママ)</sup>飾に余念がない

M夫、K夫、T夫、O夫、Y夫が協力 I夫、S夫が協力

前者は客を乗せる船 後者は捕鯨船をつくる よく考えてつくり作ぶ

T O夫 イーゼルに絵をかく

## 保育における「話し合い」と保育内容

船 ミナト丸と命名 大阪より大分にゆく O i 夫と船に乗りに行く  
燈台の事など話し、刺激する いろいろ興味をもつ  
食堂の事や舵の事等話す 無線電話について船長の仕事について話す（後略）

25日の日誌には2、3人の男児の2つのグループが保育者の働きかけによって互いに刺激を受け、ボートづくりに熱中していった様子が記されている。もともとは子ども達から自然発生的に生じた遊びであるが、その発想に着目した保育者がかかわることによって遊びが焦点化し始めたのが分る。

26日はあいにく休園で、27日に25日の遊びが再開される。参加した幼児は多少変化している。しばらくして保育者は遊びが停滞気味であると判断し「話し合い」を持つ。これによって、子ども同士だけでは気づきにくかった船の中の仕事に注目が集まり、その役割をめぐってひと悶着あった様子が記されている。なお、この日の降園前に「食後、ボートの本を一緒に見る」とあり、保育者がこの遊びをクラスでより広く共有化できるように図っているのが分る。この過程から、子どもの自発的な遊びに「話し合い」を加えることによって、子どもの経験が焦点化したり目的になるなど、質的变化が生じたことが理解できる。（図—1の(2)参照）

### (3) 経験を発生させる「話し合い」

前述の(1)や(2)においては子どもから生じた遊びや活動を確認したり深化させる役割を「話し合い」に見い出した。さらに「話し合い」は保育者が子どもから新しい経験や活動を引き出す役割を果たす。同じく黄組の1月30日（金）～2月4日（水）の日誌を取り上げて考察してみる。

1月30日（金）

10時 片づけ 相談

手紙が届くまでの話 封筒の書き方 手紙の書き方 閉じ方

切手をはる事 郵便屋さんの仕事 切手封筒及び

宝塚にきた手紙と葉書を見せる 興味あり

いささか唐突であるが、この日の自由遊び、作業の間に保育者は封筒や手紙を遊びの材料として用意しておいた。その後の集まりの時間に、郵便屋さんについて「話し合い」を持っている。実物の手紙を子どもに見せるなどして興味を持たせ郵便屋さんごっこへの導入を図っているのが分る。なぜ、この時期に郵便屋さんごっこが必要なのか明確ではないが、社会生活に触れることや併せて読み書きへの関心を持つことなどがねらいにあるらしい。

1月31日（土）

郵便屋さんの遊び興にのり M夫 特にポストの下の とめがねを用意してくる  
ポストができ次にかばんの必要を感じず 次に切手の必要を知る  
切手よく考えてつくる (後略)

前日の「話し合い」がきっかけとなり、子ども自身が次々と課題を見い出して郵便屋さんごっこが盛り上がり始めている。この日は片づけの後また切手についての「話し合い」があり、さらに子どもからの希望で保育者は絵本「モリノユウビンヤサン」を読み聞かせている。

2月3日(火)

手紙を書く事がはやり出す 1回1回配達する  
もらった子どもも書く子どもも大喜び

2月4日(水)

手紙書きが相変わらずはやっている

その後この郵便屋さんごっこは上掲のとおり継続し、より総合的なお店ごっこへと展開して  
いっている。

この事例は、保育者の計画的な課題が「話し合い」によって子ども達に伝えられ、子どもの  
関心が高まる過程で子ども自身が新たな課題を見い出している様子を伝えている。(図-1の  
(3)参照)

以上、日誌を通した考察から、本園における「話し合い」が保育内容の展開と緊密に連動し  
ているのが分かった。つまり、「話し合い」は保育内容に深まりや広がりをもたらしたり、時  
には全く新たな子どもの経験を生み出す役割を担っている。幼稚園や保育所における保育内容  
は、冒頭で触れたように、子どもの興味や関心に基づく主体的な活動と保育者の教育的意図か  
ら計画された活動とが織り成されて成立するものである。それならば「話し合い」は両者を接  
合させ次なる保育内容を生成させる場だと言える。

しかし、この点は重要ではあるけれども慎重に考慮したいところである。なぜなら、「話し  
合い」が保育者と子どもの相互の主体性を統合させると言っても、保育室において優位に立つ  
保育者が、「話し合い」を子ども集団を統制するための道具に貶る恐れがある。それは、かっ  
ての集団主義保育の実践の中で時として生じた事実である。「話し合い」は一見民主主義的な  
方法であるが、実質的には保育者の意図を子ども達に浸透させ新規な活動を受容させるための  
誘導的な技術に終わってしまうこともあるのではないか。「話し合い」はそのような錬金術で  
あってはならない。次の項ではこの点について論考したい。

#### 4. 保育における「話し合い」の意義

本研究では、保育者と子どもの相互主体的な保育を探究する目的から、保育における「話し合い」に注目し、この活動を積極的に導入してきた一幼稚園の、しかも「話し合い」が最も充実していたと目される一時期を対象に考察した。

「話し合いが充実している」とは、この活動が単に子ども達を統制するための手段や形式的な日課の埋め草に陥ることなく、多様な意味合いや自由度を備えていて保育の随所で実践されている状況を言う。それは当然ながら保育全体のありようと関係している。本項ではどのような保育が望ましい「話し合い」を生み出すのかを考察したい。そのために1942年度と1956年度の保育日誌を援用し、1948年度のものと比較する。

まず1942年度の保育日誌を見てみよう。

1942年度3学期の日誌は戦時体制を反映した内容で満ちている。すなわち、四方拝・紀元節奉載日などの行事、保育者が繰り返し語って聞かせる皇国の建国物語、配給物資をやりくりして作る給食、寒い保育室、園児数の低下などである。この状況の中で、子ども達は時局を「配給ごっこ」や「遺骨列車ごっこ」などの遊びに取り込み、ささやかな弁当や給食に目を輝かせて暮らしている。こうした園生活の中で、本園が継承してきた「話し合い」は細々とその命脈を保っているのが読み取れる。

日誌の文面から「話し合い」や「相談」の語が見出されたのはわずか2回だけである。1948年度3学期の日誌にはほとんど毎日あったのに比べると大きな違いがある。また、その内容について言えば「忠義について」および「遊びについて」であった。前者は保育者が建国物語を読み聞かせた後に持たれたものであり、後者はごっこ遊びでの行儀や言葉使いの悪さを諭す目的で「相談」が持たれた。(資料1参照) 日本を覆っていた戦時色が、「話し合い」そのものの存続を危うくしていたと推測できる。

次に1956年度(3学期)について触れる。前述の42年度と48年度の保育日誌は、戦前・戦後という時代背景の違いがあったにもかかわらず、一日の流れに沿って子どもの姿や保育を振り返り反省や感想を加えていた点では共通していた。ところがこの56年度は明確な変化を示している。最も視覚的に訴える特色は、罫線による細かい区切りである。前述の2誌が、子どもの生活と保育者の思いをそのままを表出していたとするなら、この日誌は一日の生活をいくつかの側面から区切っている。区切られた一つ一つの枠の中に子どもの活動や保育教材、保育者の指導内容が簡潔に記入されている。一番上の枠はその一週間の主題(ねらい)を掲示している。下に続く子どもの活動や保育教材は、基本的にこの主題に関連したものである。それらは、自由遊び・自由製作の他、言葉や絵本の分野・歌やリズムミクな動きなどの音楽的表現の分野・自然観察の分野・社会性や集団生活に関する分野に区切られている。最下欄に欠席児や評価・反省を記入している。この日誌は、前述の2誌と比べると記事が整理され、主題とそれに基づいた保育内容の展開が明確になったという観がある。少なくとも、保育者が何を指導したのか

が明確に伝わる。しかし、相対的に子どもの姿を捉えた記事が希薄になっている。

これらの点が、すべてではなくても56年刊行の「幼稚園教育要領」とその背景にあった幼児教育行政、幼児教育観の変化を反映していると言えないだろうか。すなわち、試案であった「保育要領」に代わって「幼稚園教育要領」は教育課程編成の公的な基準となった。当然、「要領」に示されたねらいの習得を目ざして指導の計画が立案されねばならない。この56年度の日誌自体が週日案の形式を採り、週毎の主題とその展開が読み手にも分かるようになっているのは、計画の立案が必須となった時代の要請を反映しているとも取れる。その中で「話し合い」はどのように継承されたのだろうか。

日誌によれば「話し合い」の活動は毎日行われており保育の中に定着している。頻度だけを比べると、むしろ48年度よりも高い。「話し合い」の時間帯は、自由遊びの後か外遊びの後であって、48年度とほぼ共通している。しかし、48年度ではそれ以外の時間帯でも柔軟に「話し合い」を持っていたのに対して、56年度ではディリープログラムの中で固定化されてしまったようである。また、「話し合い」や「会話」といった語の他、「発表」や「生活経験発表」が散見できるが、これも当時の保育において新しく導入され始めた語である。

「話し合い」の内容は、9割ほどが主題に関連するものであった。主題と関係ない内容は4件だけであった<sup>9)</sup>。(資料2参照)つまり、この時期の「話し合い」は、「主題」との一貫性を保つよう保育教材や活動の一つ一つが周到に計画された中で持たれた、いわば保育者主導の「話し合い」であったと推測できる。

以上、2誌の史的考察を通して「話し合い」の持ち方や内容が保育全体のありようと緊密に関連していることが理解できた。換言すると「話し合い」が真に保育者と子どもの相互の主体性を接合させるものとなるためには、保育者による時間や活動の区切りを緩やかにすることが必要である。これが補償され、子どもの経験や気づきが幅を広げることによって「話し合い」も活性化されよう。子どもの自由や主体性が制限された保育では、「話し合い」は意味を持たず形式的になる。

しかし、また、逆も言える。つまり、子どもの自由や主体性が尊重された保育だからこそ「話し合い」が必要となる。「話し合い」は生活の中でそれぞれの経験や気づきを持った子ども一人一人と保育者が参加するのが前提である。そこで為されるのは基本的なルールを守った自己表現であって、形式的な「発表」ではない。このような「話し合い」を通して、一人一人では限界があった経験や気づきが図-1で示したような展開を遂げる。それは、そこに参加した保育者にとっても同様である。これを示したのが48年度の日誌である。48年度の日誌には、しばしば「考える」「いっしょに考える」という言葉が見えるが、それは主体的な一人一人の存在を基本とした上で他者との分かち合いを尊重した保育実践であったと言えよう。そのような中で行われる「話し合い」だからこそ意義があるのではないか。遠くはフレーベルの理念を汲んだ個と集団のありかたを反映した実践ではなかったか。

## 保育における「話し合い」と保育内容

おわりに

本研究では、保育者と子どもの共生的保育の構築を検討する手がかりとして、保育における「話し合い」を取り上げた。また、そのために、保育日誌の読み取りを通して「話し合い」の実践を考察してきた。また「話し合い」を成立させるための保育のありよう自体にも触れてみた。その結果、上述のようなささやかな結論を得た。今後は、保育日誌の読み取りに留まらず、保育における実際の「話し合い」を通して考察を深めたいと考える。

1月15日 晴

室内 曇りがちの日に珍しく暖かい。出席16名。

朝、石炭が届かないので戸外に出し「カケ足」と「体操」をする。

風がないので皆喜んでよく走る。そして元気よく室内に入りそれからママ事、大積み木の遊びをする。車ゴッコそれに配給ゴッコがはやる。「マツズミ」の配給ですとヒハの長い積み木を置いてゆく子、「オルスデスカ、オルスデスカ」とどなっている子、「卵をもらっていらっしい、四つですよ」と叫ぶ声。その間にF夫、K夫、Y夫、K子に並板のテストをする。Y夫、K子等から並べるが、よくやる。殊にK子よくする。

K夫は二、三度投げ出したい程困る。リズム、分列行進のおけいこそして晝食（給食には卵が多い）

終わってカード遊び、本読み（ミクニノハジメ、チュウギナケライ）

忠義というふことなど話合ふ 写真を渡して持ち帰らせる。

資料1 1942年度の保育日誌より（下線：引用者）

2月11日（月） 晴

冬の自然界（氷、つらら）
ひな段、内裏さま、クレバス画、つみき、布人形と洋服
「花も鳥も目がさめて」 寒さの中にもお守り下さってありがとう
<u>つらら、氷の会話</u> 、それぞれ氷やつららの出来るわけを童話風に扱い、体験を語らせる しもやけの予防、氷の中のばいきん等について
雪のペンキやさん、氷すべり、小熊と魚、ゆりかごのうた
スキップ、ギャロップ、つま先歩き、ボート、スケート、リズムバント（朝のいのり）
氷のはった所を見、足でふんでみる
氷の中のばいきんに気をつける
ヒヤシンス、花が開く
欠席

資料2 1956年度の保育日誌より（下線：引用者）

田 中 まさ子

註

1) 乾孝『乾孝幼児教育論集』 風媒社 1980年 p.166

2) 例として、黄組1月17日の「保育日誌」を上げる。

「歌をつくる相談をする デンシャ、風、てまり、はねつき、動物園、おにごっこ、こんな  
題でつくる。K夫、T夫、S子、Y子、よく発表し、うまい。

デンシャガトオル ガシヤガシャ ポー、タクサンノツテルネ

サムイカゼガツイテクル ユキガコンコンフツテクル サムイナサムイナ

ポンポンテマリヲツキマセウ ネエサンウマイナ マダマダツクゾ

(以下、略)」

3) 『日誌』によれば緑組は「相談」が10件、「話し合い」1件、黄組は「相談」23件、「会話」4件、「批評」2件、赤組は「相談」3件、「話し合い」10件である。この他、「会話」や「話し合い」などの活動名を明記していない話し合い的な活動も散見できる。ここでは明記されているものだけを取り上げた。

4) フレーベル著、荘司雅子訳『フレーベル全集 第4巻 幼稚園教育学』玉川大学出版部 1981年 p.447

5) M. M クック (1870-1958) の作成によるディリープログラムである(聖和大学歴史資料室蔵)

6) 岡田正章他『戦後保育史 第1巻』 フレーベル館 1980年 pp.48-51

7) 南信子氏談。日誌からも参観者がたびたびあったことが窺える。

8) 聖和幼稚園100年史委員会『聖和幼稚園100年』 聖和大学 1991年 p.56、南氏自身も幼稚園主任としてH. ヘファーナン氏と面談している。

9) 1956年度3学期の日誌には29件の「話し合い」が文面に示されているが、これは註3)に記したように1948年度黄組の件数と同じである。56年度では、このうち25件までが主題と関連した内容であった。

※本研究の執筆にあたって資料を提供して下さいました聖和大学とインタビューにご協力下さいました南信子先生に心より感謝申し上げます。